プロローグ　原発は単なる電力生産工場ではない……9
3・11以後の視点　原発と核武装のタブー

第一章　広島に原発を建設？……13
3・11が原爆と原発をリンクさせた
「広島に原発を」というイェーツ提案　日本に原発を供与すべし
ゼネラル・ダイナミックスの野望　日本の核武装を想定
第五福竜丸事件で放射能パニック
すべてが対日心理戦に組み込まれてゆく　「協力協定」が先決
アイゼンハワーはプルトニウムを問題視
広島原発は何度も検討されていた　「協力協定」の足かせ
原発よりも被爆者救済策　原爆傷害調査委員会の実態
ダレスは原爆投下に抗議した　ソ連と日本の左翼も被爆地を狙う
中止されていた原爆五周年大会　「原爆一〇周年世界大会」をめぐる思惑
イェーツ提案を利用した心理戦　反感と猜疑心

折衷案としての医療用原子炉　「協力協定」内か外か
日本の本音は医療用ではない　沖縄原発
主権問題で沖縄原発は見送り　広島・長崎の大学病院への援助
原爆傷害調査委員会にまつわる後ろめたさ

第二章　なぜ、日本最初の原発はイギリス製だったか……

正力の宣戦布告　プルトニウムへの執着　見返りに求めたもの
最低でも原発が欲しい　ブルックヘヴン調査団の回答
アメリカとイギリスを競わせる　正力の真の狙い
揺さぶられるアメリカ　核武装のためにどのくらい必要か
秘密条項を解除　ソ連がアプローチ　イギリス視察団が重視したのは
発電量かプルトニウムか　なぜイギリスから輸入したのか
アメリカが原発導入のシナリオを描いた？　岸信介の自衛核武装合憲論
核武装と安保改定　正力と岸は連繋していたか
ＣＩＡによる日本の核武装分析　岸の切ったカードは効いていた

プルトニウムを売って利益をあげる　イギリスならばプルトニウムを渡す
玉虫色の日英協定　正力のささやかな勝利

第三章　東海発電所と核武装

原子力委員長・佐藤栄作　研究された核武装の可能性
機密文書「日本への原発の輸出」
東海発電所の建設はイギリスの民間会社
GECが格安で請け負った理由　最初の障害は耐震設計
なんでも替えろ、交換しろ　GEC、東海村から撤退
東海発電所を襲う故障と不具合　困惑するイギリス政府
妥協か破滅か　イギリス政府が仲介に乗りだす
広がるイギリス製原発への不信　日英両政府に禍根を残す
隠蔽された東海発電所のトラブル　メディアコントロールの最初の例
東京電力は知っていた　佐藤政権の核政策に与えた影響
嵯峨根遼吉も研究していた　ウラン調達、研究者育成も頼れず

日本に残された道

第四章　ロッキード事件とウラン調達

原発建設ラッシュと核燃料　田中角栄は濃縮ウランの大量輸入を決めた
濃縮ウランとエアバスは同時輸入
田中の資源政策はアメリカを怒らせてはいない
キッシンジャーとの会談メモ　不本意だったエアバス輸入
濃縮ウランはアメリカに頼るしかなかった　武器輸入まで譲歩
田中・中曾根の抵抗　ＧＥはソ連にウラン濃縮を委託
これは「アメリカの国益」にかなう　ソ連からの輸入を認可
ソ連のウラン濃縮の実力　田中独自の資源外交などなかった
同盟国にはソ連製濃縮ウランを　ウランを求めてウランに縛られる

第五章　核なき核大国へ　193
カーターの核不拡散政策　NPTの穴　再処理工場がターゲット
潜在的核武装能力　福田が背負っていた田中の負の遺産
日本を縛った二つの項目　混合抽出法を迫られる
ifかunlessか　条件付きの潜在的核武装能力
レーガン登場で風向きが変わる　ついに中曽根が総理大臣に
プルトニウム輸送の安全性　ソ連崩壊とプルトニウムの余剰
日本の潜在能力　外交カードとしての原発
あとがき　226
本書のソース　230